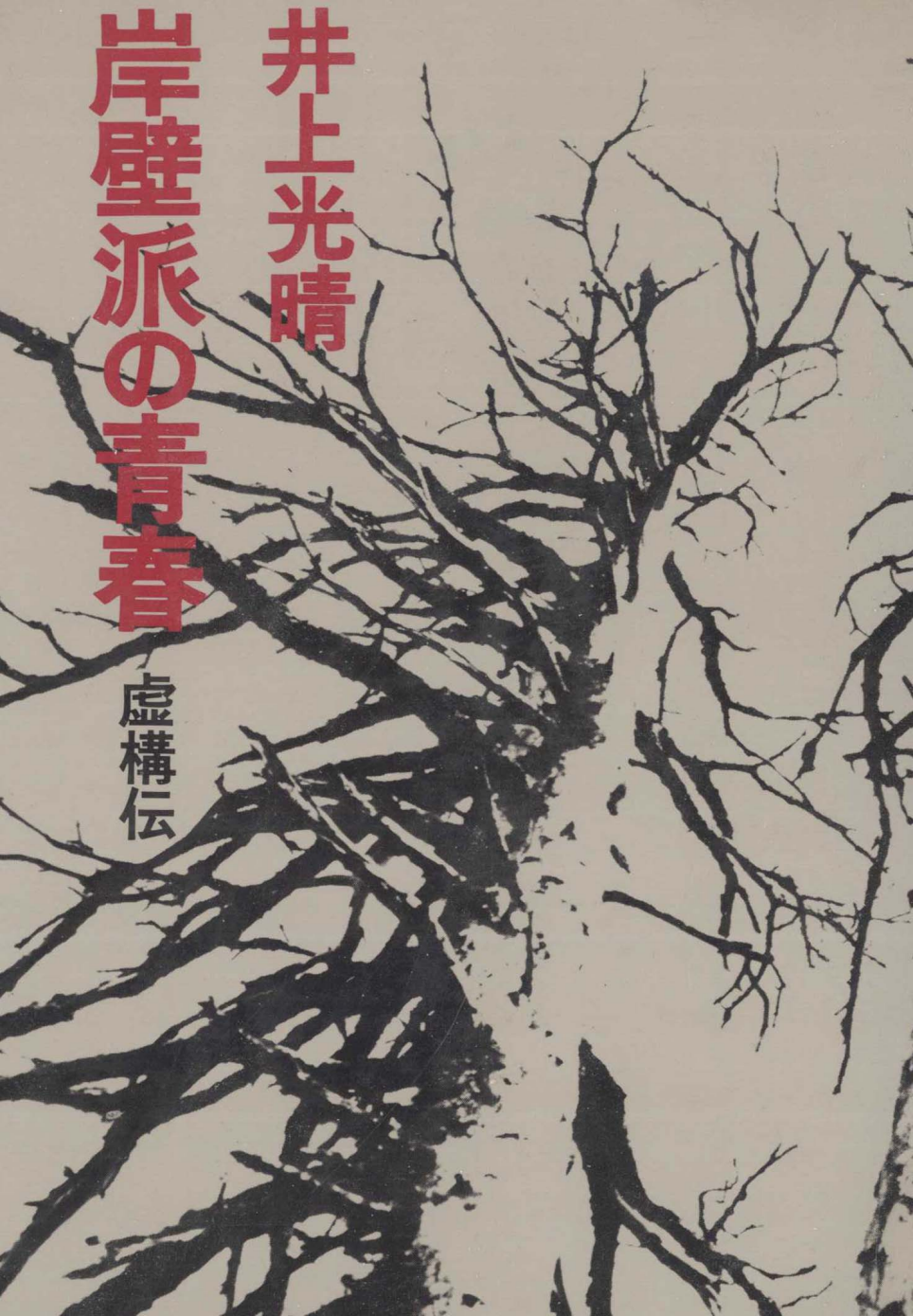


井上光晴

岸壁派の青春

虚構伝



井上光晴

岸壁派の青春

虚構伝

筑摩書房

岸壁派の青春

一虚 構 伝一

昭和四十八年五月十五月初版第一刷発行

著 者 井 上 光 晴

発行者 井 上 達 三

発 行 所 東京都千代田区神田小川町二ノ八  
筑 摩 書 房

電話 東京(281)七六五一(代表)

振替 東京四一二三

郵便番号一〇一―一九一

印刷 多田印刷

製本 筑摩堂

©井上光晴 1973

(分類) 0095 (製品) 81035 (出版社) 4604

# 岸壁派の青春

—— 虚構伝 ——



# I

銅鑼——息子の哀号ききたいか——崔和代のこと——菅牟田

部落の「朝鮮ビー屋」——兄サン初メテネ——三上於夷吉の

『白鬼』——張成伊のこと——民族独立と独学同盟の「独」

廃坑の海に漂うもうひとつの火葬場がある——

いまに坑内キャップをつけた鯛が、糞だめをつつくようになると悪態をつく、朝鮮女郎番の飼う兎小屋の下の特堤に、黄色いひらひらをつけた少女が蹲っている。

年に一寸ずつ沈むこの部落に銅鑼が鳴りわたると、少女は立ち上って死んだ蟻のような行列のあとに従わねばならぬが、泥炭のこびりついたおれの炭札入れには、どんなに握りしめても十銭銅貨が一枚しか入っていなかった。

ヤンバンからもらいうけた寸足らずの坑木を削って、自分の足枷を作っている坑夫たちの休

日を、一円ボボを買いなさいと白い切羽のような化粧をした女たちがねり歩く。

ユークスの吠える未明、売れ残った女たちは、三番方の坑夫目あてにもう一度につば椰子のかぶさる黒いトロをのぼっていくが、そのとき棹取り兪英生の肉を入れた木棺は低い納屋と納屋との間から音もなく動きだし、齒と齒、眼と眼の葬列は、女たちと燃えあがる闇の中で交錯する。足のとれた肉みたいか、息子の哀号ききたいか。

(銅鑼 1962・3)

一九六七年十一月十日の朝、私はその銅鑼が最初に打ち鳴らされる地点に立つ。長崎県西彼杵郡崎戸町菅牟田。崎戸炭鉱二坑の居住区から曲りくねった長い坂道の袖には、二十六年前と同じく暖竹が生茂っていたが、海岸近くにあった二階建の朝日楼は、すでに跡形もなく消え失せ、家畜小屋とも物置ともつかぬ細長い建物が半分倒れかかっていた。

朽ちた防波堤の上に白菜を並べている女に近づいて、私はきく。

「やっぱりこは、この菅牟田は今も少しずつ沈んでいるんですか」

色の黒い四十がらみの女は殆ど無表情な顔をして答えた。

「そりゃそう。去年まで棒杭の所まできとった波がだんだん家の方に近づいてきよるからね。そ

いでももうどっちみち来年までだから」

すでに一坑が終掘（事實は合理化による閉山）し、五百人余り残った鉱員によって操業している二坑も、六八年三月になれば予定通り閉山になるので、海底掘進による地盤沈下は打ち止めになるだろう、という意味なのだ。

「あなたはずっと菅牟田におられたんですか」

過ぎ去った年月の手がかりを得ようとして尋ねた、私の言葉の何処が気に障ったのか、女はぶいと横を向いたきり、返事をしない。私は仕方なく、海沿いの道を白い標識の立っている方向に、ゆっくりした足どりで歩きだした。以前そこには菓子や雑貨を売る店舗が建ち並んでおり、品川という豆腐屋があったはずだ。

高等小学一年の同級生・品川英二。彼は毎朝登校前に自家製の豆腐を売って歩き、帰りにはきまって、三区の納屋（現在の炭住をそう呼んでいた）に住む私の所へ寄ったのである。角の欠けた豆腐と掌いっぱいのおから。私と祖母、妹の三人は殆ど週に二度、朝からめしなしの湯豆腐としゃれていた。当時（一九三九年）、祖母は炭鉱の清掃婦をしていたが、いくら家賃が只同然でも、そうしなければくらしして行けなかったのだ。

品川豆腐屋から三軒程海岸寄りの角に、栄屋という雑貨店があった。一九三八年の夏、私たち三人は佐世保から親類を頼って崎戸炭鉱に移ったのだが、あまりにひどい恰好をしていたので、



到着した翌日、お美代さん（祖母の姪）から、とりあえず半袖シャツを買い与えてもらった店である。

今時珍らしく、綿入れのちゃんちゃんこを着た幼女が両足をぶらんと垂らして低い土堤に坐っている前に、私は佇む。

「ひとりで何しとるんね」

「海を見とるんよ」

「今いくつ、年は」

「五つ」

「名前は」

「今里ゆみ子」

「友達はおらんとね」

「学校が終ればしき子ちゃん達が帰ってくる」

私は低い土堤際の波に濡れた鉛色の潟を踏んで清津亭に向う。太平洋戦争中、朝日楼と同じく朝鮮人坑夫用の女郎屋であった清津亭が、むろん今存在するはずもないのだが、もし建物でも残っておれば、閉ざされた未来を見つめ通して、屈辱にまみれた炭札係の青春を、私はもう一度自分のものにすることができたらう。

清津亭のあたりは名も知らぬ雑草が墓蔭でも敷きつめたように折り重なり、その一隅にどういうわけか、裸の土がこんもりと盛り上がっていた。

菅牟田部落の「朝鮮ビー屋」清津亭。私は二十六年間、その名前を忘れてはいなかったし、恐らく死ぬまで、そこで傷ついた思いを離れることはあるまい。朝鮮人娼婦・崔和代から浴びせられた、阿呆下の岸辺に打ち上げられた小饅を叩きのめす時のような嘲笑。

一九四一年（昭和十六年）の十一月、二坑の繰込場で炭札係をしていた私はそこで初めて女を知ったのだ。十五歳。しかも相手は私が清津亭にたずねて行った十六歳の崔和代ではなかった。

二坑の浄心鼻から渡し舟でわたる本郷の高等科（小学校）に私が入った時、崔和代は一級上（高等二年）にいた。弟妹たちと一緒に、独身寮の賄婦をしている朝鮮人の母親とくらしていたが、ぬけるほど色が白く、成績が良いのをねたんでか、学校ではすぐ、「崔さんは死んだ父親を日本人だといえるけど、ほんとに朝鮮人よ。日本人の男がどうして朝鮮人の女を嫁にもらうもんか」という声が耳に入ってきた。噂の通り、父親が日本人だというのは、恐らく崔和代の作り話だったのだろう。私と本の貸借りをするようになってから、彼女は一度だけ、父親は死んだのではなく本当は生き別れなのだと、暗に日本人であることをほのめかそうとしたが、私は生返事をしてその話を避けた。

中段にあった共同浴場の捲上機の陰で、私たちは取りとめのない会話をかわした。

「崔さんは卒業したらどうするんね」

「うちは名古屋に行くんよ」

「名古屋に、何しに。選炭に行くんじゃなかったとか」

「家にはまだ弟たちがおるからね。選炭場の受銭では米代にもならんし、名古屋に行けば少しでも金を送れるんよ」

「名古屋か。名古屋に行けばもう会えんようになるな」

「名古屋に行っても、うちは井上さんのことは忘れんよ」

「忘れんといっても、名古屋に行ってしまえば、どうにもならん」

しかし、崎戸を出て行ったのは彼女ではなく、私の方であった。高等科一年を終了すると、本坑労務課員の口利きで、共和製鋼所（大阪市西淀川区）の技師長をしていた安田福次の書生として出発することになったのである。

中学校に行けぬ瓜吉は

夜間工業に入れてもらえる

という約束で

高等一年を終えると

尼ヶ崎の書生になるために

ひとり出発した

腐れかかった

手みやげの生鱈よ

尼ヶ崎まで生きかえれ

ばあちゃんが折角持たせてくれた生ぶりを

汚れた波の段々につけながら

つけばぶりが生きかえるものと

つけながら

ちらちら下関の灯が海峡に揺れて

ぶりのうろこを冷たく映した

ばあちゃんよえらくなつて

きつとかえってくるぞ

(関門海峡 1952・12)

尼ヶ崎市難波通りの安田福次宅に寝起きするようになったものの、書生とは名ばかり、体の良

い難用係であつた。昼は主人の勤務する共和製鋼所で分析見習工として働き、夜間通学するのだが、休日を含めてまるで自分の時間というものを持つことができなかった。しかもあらかじめ手続されていた大阪工科学校は、教師も生徒も勉強に対するひと欠片かけの情熱もない、ただ授業料さえ受取ればすむというふうな建物にすぎなかったのだ。

朝五時起床、庭と廊下の掃除。製鋼所での午前中はおっぱらフラスコや分析器具の洗滌。午後には電気炉関係の補修下働き。夜間学校から帰宅し浴室の掃除を終えて大体十一時半か十二時に就寝。働くのは慣れていたが、何よりも苦痛だったのは、毎朝大手前の女学校に通う長女の靴を念入りに磨かなければならなかったことである。

大阪の生活についてはまた書く機会もあるだろう。一年足らずで崎戸に戻ってくると、すぐ「崔和代は菅牟田の朝鮮ピー屋にいる」という声が私の耳に入った。話を確かめるために母親の住む納屋を訪ねたが、何処にいろのかさっぱり要領を得ぬまま、私は戻らねばならなかった。

毎月二回の受銭（賃銀支払目）と休日が近づくと、菅牟田にある数軒の女郎屋から、朝鮮人売春婦の行列が繰出す。ジャンジャンジャンと船出の銅鑼とそっくりの音を鳴らして、独身寮や大納屋の周辺を練り歩くのだ。そのたびに私はおののくような気持を抑えきれなかったが、崔和代の姿は見当らず、やっぱり名古屋に行ったのかもしれないと考えながら、安堵とも不安ともつかぬ思いを繰返していた。

そうしたある日、赤、緑、桃色の紐と襟をつけた華やかな朝鮮服の行列の中に、崔和代の姿を見出したのである。真白く硬張ったような化粧をし、赤い口紅を引いていたが、まさしく当人に違いない。私は中段から四区の敬天寮に降りる平べったい石段のところまで後を追ったが、彼女は振り向こうともせず、ジャンジャンジャンと銅鑼が鳴り響くたびに、心持ち顔さえあげるようであった。

そして翌日の午後、意を決して菅牟田の坂を降りたものの、清津亭の近くでためらっている私に、朝鮮服を着た鼻の低い女が「兄サン、アソパンネ。受錢モロタラキナサイヨ」という声をかけてきたのだ。小説『褐色の唾』（1961・4）の中で、私は全く脚色なしに、それからのことを描写している。

「ちがうよおれは」一度ふりむいた顔をまたもとに戻して彼はいった。

「外ニイルヨリ、家ノ中ニ入ンナサイヨ。寒イヨ」三十すぎ位の朝鮮服をきた鼻の低い女がいった。

「ちがうよ」彼はいった。

「誰カ待ットルノネ」

「ちがうよ」

「ヨンテキテヤルヨ、タレネ、イウテモヨカタイネ」

「昨日行列の中にいたけど、崔さんはやっぱりあそこに勤めとるとね」イウテモヨカタイネという朝鮮人の笑い顔につられて、彼自身思いがけぬ言葉をだした。

「崔サン、アア、春子サンネ、イルヨ。家ニキナサイ、イルカラ」と女はいった。

「春子じゃない、和代というただけど」

「崔サンハ春子ヨ。家テハ名前変ルカラネ。……キナサイ、ウレシカルヨ」

くるりと背中をむけた女に誘い込まれるように彼はついていった。もちろん女郎屋によるという意識は全然なく、ただ崔和代に会えるならとそう思ったからである。

緑色のペンキで小さく清津亭と書かれた看板の下っている入口を入ると、そのまま寮の廊下のような通路を通って彼は階段の横にある一番端の三畳に案内された。それから「オ茶持ッテクルネ」といって女は出ていこうとしたが、板戸のところで体を半分外側に向けるようにして「兄サン、受銭イクラモッテキタネ」ときいた。

「いまここには五円位持つてるけど……」金があるのかと思ひながら、十五日分、残業分とも二十七円五十銭のうちから祖母に渡した残りの金額をいった。

「待ッテネ、寒イナラソコノ毛布足ニマキツケテ」安心したような顔をして女は去った。

二十分位経って鼻の低い朝鮮服を着た女はまた戻ってきたが、部屋に坐るとすぐ「金五円」と

いった。彼は持っている金を全部だして、その中から一円札を五枚渡したが後には三十銭ほどしか残らなかった。

その金を受取ると、さっきまでの親しそうな笑い顔が一度に消えた表情になって女は押入れから薄い布団を二枚だして敷いた。

「崔さんはくるとね」その敷布団に追われるように戸口の方に体をよけながら彼はきいた。

「春子サンハイマオ客ネ、コラレナイカラネ、ワタシカ相手ニナルヨ」毛布をひらひらさせて女はいった。

「崔さんがこなければ帰るよ」彼は立上った。

「待チナサイ。カエルトイッテモ、ココニアカッタラ、金ハ返セナイヨ、兄サン損スルヨ」女は彼の菜っ葉服の下にはみだしている毛糸のシャツをひっぱった。

「金は崔さんにやったんだからよかよ」やるなら直接渡したかったなと彼は思った。

「春子サンヨリ私カウマイヨ、金損スルカラアソビナサイ」

金は崔さんにやったのだという彼の言葉の意味がつかめなかったらしく女は熱心な口調でいった。その時、彼ははじめてこの女は勘ちがいでいるのだ、おれが朝鮮ピー屋に遊びにきていると思っているのだということに気づいた。真黒い軀全体を貫くような衝動がつづいて起り、彼は反射的に立ち上った。



「おれは帰るよ」

「トシタトネ、マア坐ランネ」と女がいった。そして彼の胴体にのばした腕をまるで唐手のような恰好で動かすと、腰が崩れて倒れかかった彼の頭をあつという間に自分の股と股との間にはさみこんだ。股と股のつけ根のざらざらとした肉が直接彼の鼻と唇の先に触れた。(中略)

兄サン初メテネ、初メテナラ初メテトソウイウトヨカッタノニネ、コンナ朝鮮ノ女ノタメニワルカッタケト、シラナカッタカラカンニンシテネ。コントキタイクラオ客サンアツテモ春子サノヨブヨ。シカシ兄サン初メテタカラ私ノコト誰ニモイウタラタメヨ。勞務カラ叩カレルカラネ。私ハ淋病モツテナイケト、勞務ハウルサイカラネ。にんにくの匂いのしみついた蒲団をまくりあげて、どこからとりだしたのかさっきまではしていなかった短い男の股引のような下着をつけながら、女はそう一言一言念を押したが、世の中が逆さになったような氣持のままその家をでて防波堤の下の道を廻り、再びその清津亭と向いあう坂道を上りかけた時、つい今しがた彼を見送ったばかりの、鼻の低い女の声をまじえた数人の女の嘲笑が、二階の雨戸のかげから彼に浴びせられたのである。

白菜を干している女が「ゆみちゃん」と呼ぶと、さっきの幼女が立ち上がって小走りに駆けだした。あの女の子だったのか。前方から短い坑内用ビッケルを肩にした男が歩いてきて、すれ